

# “What's past is prologue”

MARCH No. 5 2008

## 巻頭言

専修大学社会知性開発研究センター/歴史学研究センター代表

近江 吉明

文部科学省の「私立大学学術研究高度化推進事業 オープン・リサーチ・センター整備事業」として、2003年に本学歴史学研究センターで始まった「フランス革命と日本・アジアの近代化」も今年度をもって完了する。すでに、2007年11月24日、25日に当事業最後の第5回国際シンポジウム「フランス革命研究とミシェル・ベルンシュタイン文庫」が開催され、このシンポジウムをもって、当研究センターの5年間の研究事業は総括の段階に入っている。

当研究事業の柱の一つであった「ベルンシュタイン文庫の史的価値とその性格」分析をめざした調査・研究も、『ベルンシュタイン文庫目録』（第6巻）に収録された史料について、パリのフランス国立文書館や図書館所蔵のそれらとのダブりを1点ごとに確認するという作業と、同時に、当文庫全史料中の現県別史料群を地方の各県文書館、図書館サイドから同様のアクセスをするという方法によって、その全容を掌握するための手順が明示された。ここまでの取り組みにおいて、まだ調査は始まったばかりではあるが、前者においては1,017点のうち38.64%が当文庫にしかないことが明らかになり、後者では、県単位の確認に留まるものの、362点中約46%しか発見できなかった。これだけでも当文庫のフランス革命関連史料群の史的価値の一

端は見てきたというものであろう。手間のかかることではあるが、史料調査の原則に基づくこのやり方で今後とも地道に仕事を継続するしかない。

また、事業計画のもう一つの目玉であった当文庫の史料群をテーマごとにまとめ『ベルンシュタイン文庫所蔵フランス革命史料集』として復刻する作業が軌道に乗ったことは幸いであった。今回はその第一弾として、「ルイ16世裁判」について6分冊を出版する運びとなった。しかも、専修大学出版局からの出版となったことは本学にとっても大変喜ばしいことである。学術研究分野でのこうした形での貴重な史料情報を本学が世界に向けて発信できるのは当文庫を所蔵するが故のことではあれ、社会知性開発のスローガンを具体化するものとしても大事な事業である。

とにもかくにも、本学が、5年間の当事業のなかでアジアにおけるフランス革命の研究拠点として認知されたことは確かであろう。そればかりか、世界の研究拠点としての立場も担わざるを得ないことを新聞が報道（『朝日新聞』2007年12月13日付朝刊）し始めている。これに私たちは、当文庫を所蔵する限り答えていかなければならないことは当然として、これは、本学に課せられた社会的責任の一つでもある。